

「北海道・北東北の縄文遺跡群」を活かした青森県のまちづくり

岡田 康 博(青森県三内丸山遺跡センター)

はじめに

2021年7月、青森県・北海道・岩手県・秋田県及び14の関係自治体が進めてきた域内の縄文遺跡群で構成する「北海道・北東北の縄文遺跡群」(Jomon Prehistoric sites in Northern Japan)は世界遺産となった。現在、日本国内で最も新しい世界遺産である。

世界遺産縄文遺跡群の価値

「北海道・北東北の縄文遺跡群」は日本の歴史の時代区分では縄文時代に属する。縄文時代は約15,000年前に始まり約2400年前まで続いた狩猟・採集文化の時代である。

縄文遺跡群の価値は、「北東アジアにおいて、採集・漁労・狩猟を基盤とした定住を1年以上の長期間継続した世界的にも稀有であり、たぐいまれな精神性を含む生活の在り方及び自然環境の変動に応じて変容させた集落の立地と構造を示す遺跡群は、農耕以前の人類の生き方を理解する上で重要」である。



縄文遺跡群の構成資産

特別史跡三内丸山遺跡

我が国を代表する縄文時代の大規模集落遺跡である(写真)。縄文時代前期から中期にかけて(約5900~4200年前)長期間にわたり定住生活が営まれ、集落では堅穴住居、成人用土坑墓、小児用甕棺墓、掘立柱建物、盛り土、捨て場、粘土採掘穴、貯蔵穴、道路などが計画的に配置されている。縄文時代における集落の全体像や変遷、社会構造、自然環境や生業、精神性などを考える上できわめて重要な遺跡であることから、平成9年3月5日に国史跡、平成12年11月24日には特別史跡に指定され、出土品の一部は平成15年5月29日に重要文化財に指定されている。

縄文遺跡群全体の保存・活用を担う「縄文遺跡群世界協議会」の事務局がセンター内の世界遺産課に置かれている。



世界遺産登録後の変化

①見学者の増加

- ・登録前から効果はあるらしい
- ・遺跡巡りツアーなど商品造成、縄文をまじめに学びたい、知りたい人達が結構多い。

②地域の活性化(地域が元気になった)

- ・地域が保存と活用に積極的に参加
- ・広域連携の実施

登録及び保存活用の推進

①登録を見すえての準備

「青森の縄文遺跡群」活用推進ビジョンの策定

⇒県民参加で、縄文遺跡群の将来像や基本方針、施策の展開、推進体制などをまとめる。

全庁、各自治体が参画したものの、世界遺産関連事業を全て把握することは困難で、効果は一時的・限定的ではない。結局は各遺跡の努力次第。

②組織体制の再構築

登録後知事部局にあった世界文化遺産登録推進室を廃止し、世界遺産関係業務を教育委員会に移管し、三内丸谷山遺跡センター世界遺産課を設置した。あわせて4道県全体の組織体制を見直した。

③重点的な事業展開

登録次年度から3年間重点的に事業を展開することを北東北知事サミットにおいて合意。今年度から地域を絞ったプロモーション活動を実施。

④登録効果の発信

大幅な見学者の増加など、世界遺産をもってよかったと実感できるような環境づくり



登録を振り返って

決議ではほぼ主張が認められ、大きな課題は示されなかった。⇒満点に近い評価

①時間がかかった分、しっかりとした準備ができたことが大きい。⇒推薦書作成も現地調査対策など運営も適切であった。

②文化庁、関係機関、専門家からの適切な指導・助言が大きかった。

③地域の方を中心に全国から多くの応援が励みになった。

結論として『世界遺産登録には近道はない。』と思う。また、登録のさまざまな取り組みすべては地域づくり、人づくりあるいは観光施策に関係することになるので、登録前から世界遺産を活用した地域まちづくりは始まっている、と言える。